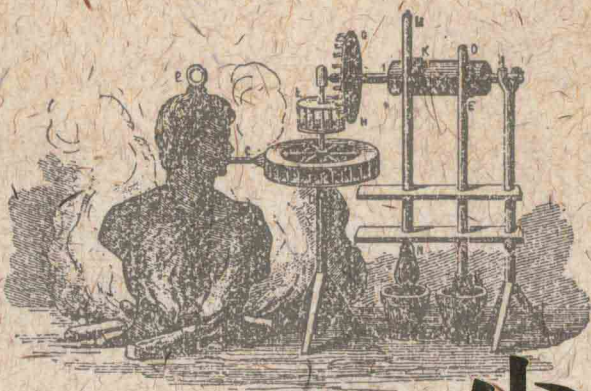


井上光晴



紙咲道生
少年の
記録

紙咲道生
少年の
記録

紙咲道生少年の記録

一九九一年五月一〇日第一刷印刷
一九九一年五月一五日第一刷発行

著者 井上光晴

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社福武書店

東京都千代田区九段南二丁目二八
千〇三電話(〇三)三三〇二二二
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 加藤製本

(落・乱丁本はお取替え致します)
(定価はカバーに表示しております)

井上光晴(いのうえ みつはる)
一九二六年、旅順に生まれる。電
波兵器技術養成所卒業。五〇年、専
従黨員の苦悩と矛盾を訴えた「書
かれざる一章」を発表後、原爆・
部落・炭鉱等の社会問題をめぐつ
て「長靴島」「彈丸村」「完全なる墮
落」「地の群れ」「荒廃の夏」「心優し
き叛逆者たち」などの力作を発表。
これまでの主な仕事は「井上光晴
作品集」(全三巻)「井上光晴新作品
集」(全五巻)「井上光晴第二作品集」
(全五巻)「井上光晴長篇小説全集」
(全十五巻)にまとめられている。

紙咲道生少年の記録

目次

紙咲道生少年の記録	7
立て、飢えたる者よ	153
点滴のための読書術	175
中将寺の男	185
くろかみ	211
火影	225

裝丁菊地信義

紙咲道生少年の記録

紙咲道生少年の記録

ようやく終電の地下鉄に飛び込んでも、胸を這う青白い炎は消えなかった。勤務割りの午後三時五十分。病棟の看護婦室に到着した途端、ブラウン管を通じてきこえた女の声が、間断なく耳奥に甦るのだ。

「……エレベーターの中で、木山さんにはちょっと挨拶したんですよ。あれが木山さんを見た最後になるのかしら。……あたしと木山さんと、それからもうひとり男の子がいました。木山さんが連れてきたのかどうか、それはわかんないけど、マンションの子じゃなかったみたい。……男の子ですか。そうね、小学生か中学一年。そんなところじゃないかしら。そうそう、折り畳みの自転車を抱えてましたよ、男の子。新しく移ってきた家の子かもしれないわね。此

処、割りかし移動が激しいのよ。……」

被害者とおなじマンションに住む中年の女性は、低すぎる口調でありながら、喋りたくてたまらぬというふうな表情をまざまざと示していた。

吊革一本に寄りかかる姿勢で、二宮優子はわざと目を瞑ってみた。折り畳み自転車はブームなんだろう、いま、誰だって持ってるさ、という出所不明の声を臉の裏に貼りつかせて。白か黒か、色をはっきりさせなきゃ、不公平だわ。

四日前の連続暴行殺人事件について、あらゆる角度の報道と推測がなされていたが、めぼしい手がかりがないのは、捜査関係筋から伝わる応答の、歯切れのわるさにも窺えるのだった。

一昨年の夏、見ず知らずの男から誘われた時の様子を、彼女は唐突に思い起こした。八月と晩秋と、時期こそ違え、地下鉄の中の時刻は、現在とまったく似通っていた。それまで連れ立っていたかのような素振りや、隣の男が口をきいたのだ。

「腹すいてるんですよ、ばく。付合ってくれませんか、ひとりじゃ淋しすぎるんでね。うまいものをご馳走しますよ」

彼女より二回りも年上だと思われる五十代半ばの男は、脱いだ夏背広の上衣を片方の腕に、さして下品でもない目鼻立ちをしていた。返答をしない彼女に、男はさらに顔を寄せてきた。

「実をいうと、昨日成田に着いたばかりなものだから、どっちをむいてもちんぷんかんぷん、

あんまり東京が変っているの、気のきいた店一軒知らないんですよ。ホテルの食事じゃ味気なくてね、赤提灯の焼鳥屋みたいなところで飲みたいんだが、何だかひとりじゃ入りづらいものだから……」

彼女がドアの方に体を移すと、勘違いでもしたのか男もついてきた。

「焼きおにぎりなんか食べさせる店があるそうですね。……」

みなまできかず、振り切る足どりで前方の車輛に彼女は去った。見えすいた言葉を餌にした男のやり方が愚劣なだけに、余計に腹立たしさを感じながら。

改札口で何やら悶着を起こしているらしい青年の背後を擦抜け、二宮優子は番号の違う出口の階段を上がった。家まで幾通りもの帰り道があるのだと、ふっとそんな気になったのだ。しかし、十一月にしては暖か過ぎる外の風に触れると、結局慣れた横断路の方へ引返した。

先夜の十時過ぎ、就寝患者の点検にまわった彼女は、南側の個室ですすり泣く工藤新を目撃した。ベッドの縁に腰をかけ、両の掌で頭を抱える恰好で子どものようにしゃくりあげているのを、出入口用のカーテンの隙間から覗いたのだ。枕元の小さな明りの中で、それは影のように浮いていた。

囲碁の世界に詳しい研修医の話によると、実力派の九段で、ひっきりなしに來訪する見舞い客との洒落な応対とは裏腹の姿態に、彼女はなぜか慌てて懷中電灯を消した。S字結腸から肝

臓に転移した進行癌の現状について、本人は充分承知しているはずだ。数日後に控えた手術が矢張り不安なのか。それにしても廊下にまでそれとわかる気配はただごとではない。

翌日の午後、配膳係にきいたという話を若い看護婦が、薬品棚の整理をしながら耳打ちするような声で彼女に告げた。

「七〇三号の人、漬物の瓶を七つも持ってるらしいですよ」

「七〇三号。あ、十全さんね。いいじゃないの、どんな漬物を持っていようと」

「それを全部、いちいち小皿に並べるんですって。おかしいと思いませんか」

「隠れて食べてるわけじゃないでしょう。普通食なんだから、何食べたっていいのよ」

「だって、七つの瓶をみんな開けちゃうんですよ。朝は梅干とらっきょうとか、そういうんじやなしに、三食ともみんな小皿につぎわけるんだって。そういつてました」

「そういうことおもしろがつっちゃ駄目よ。カナリヤのおばちゃんにもいっとくといいわ。」

……」

駅から十四分ほど歩き、石川コーポの二〇一号に入ると、シオルダーバッグを食事用のテーブルに放りだし、彼女は便器にしゃがんだ。後ろ手に長い蛇口をユニットの小さい浴槽にまわして、湯水を調節した。逃げてものはぐらかしてもつかまってしまうのなら、踏ん張って向きあうほかはない。トイレット・ペーパーを荒々しく引きちぎりながら、二宮優子は自らにいいき

かせた。

テニス選手のような、びったり身についたスポーツシャツを着た少年と、最初に出会ったのは、八月に入つてすぐの日曜日であつた。新宿西口にあるデパートの屋上で、遅い午後のひとときを所在なげに過ごしていた彼女のテーブルに、ポップコーンの袋が差出されたのだ。

名前は紙咲道生。体格として殊更目立つところのない、利口そうな顔をした小学六年生であつた。

「ポップコーン、嫌いな」

一瞬見返す彼女の前に、道生は椅子を引きつけて腰を下ろした。

「いいえ、大好きよ。ありがとう。何だか、ぼんやりしてたものだから。……」

「ソフトクリームを狙う鳩がいるんだよ、此処には。そいつに僕、ギャンという名前をつけてるんだ」

「ギャンというの、どんな意味」

「意味なんかないんだ。自然にそうなっちゃったんだよ。そんな感じだから」彼はそういうと、辺りを見廻した。「今日はいないな。小田急の方に行つてるかもしれないんだ」

「しょっちゅうきてるの、此処には」

「これる時にはね」

お友達ときてるの。いいかけた言葉を彼女は口にしなかった。ひとりなのははつきりしているし、言わでもこのように思えたのだ。

時刻のせいかな、閑散とした屋上に、それから小一時間も過ごしただろうか。京王線の仙川駅から歩いて十五分ばかりの住居に母親と二人でくらししており、父親は仕事の関係で五年近くアメリカに滞在中。少年の名前も年齢もそのときいたのだった。問われるままに、彼女も答えた。現職は大学附属病院の看護婦。そういうと少年はしゅつときこえる口笛を吹いた。「あなたのおかあさんとおなじ位の年よ、きつと。……」

「子どもはいないの」

「結婚してないのに、いるはずないでしょう」

「特別の理由があるんだ」

「何が」

「綺麗な人が結婚しないのは、特別の理由があるんだって」

「お上手ね。そんなこと、何処で習うのかしら」

「F・1がいったよ。同級生の女の子で、すごいカーキチなんだ。何でも知ってる。先生でも人生相談やりあったら負けちゃうよ。……」

隣接する空のテーブルに飛んできた鳩がいて、ポップコーンを投げようとする彼女の手首を